

「社会的」な暮らしについての一考察
——高齢者福祉施設「杜の家やしお」の取り組みから——

**Rethinking of the Engagement with Living “Social” at Elder Care
: The Efforts for Activity and Care at the Nursing Home, *Morino-Ie-Yashio***

岡村 圭子

人間としての連帯、仲間どうしであること、
そして親交といった“感”^{センス}の喪失は、
さまざまな仕方で人々を冒す¹ (R.D.レイン)

序章 「選択的な孤独」と「社会的孤立」

わたしたちが暮らす地域社会、いわばローカルな領域の将来について、これまで筆者は高度経済成長期に誕生した団地を事例に、社会的ネットワークに着目しながら考察してきた [岡村 2019]。いま、多くの団地が直面している課題と、それを解決すべく模索する動きは、日常生活圏としての「わたし（たち）のまち」が、将来的に、あらゆるひとびとにとって生きやすい環境になるかどうかを読み解く端緒なのである。

地域社会には、さまざまな社会的弱者がいる。高額所得者であっても身寄りのないひと、貧困にあえぐひと、人間関係が途切れて病に伏せるひと、情報技術から取り残され福祉制度からもこぼれ落ちたひと、ひとりで子育てや介護をしているひと、働きたくても働けないひと、小さな子ども、心身に障がいを持っているひと、その社会では馴染みのない言語や文化で生活しているひと、そして、これらの困難がいくつも重複しているひと。社会的属性や経済的・身体的な状況だけでは単純には括りきれない、さまざまな社会的弱者が、可視的であれ不可視的であれ、わたしたちの社会には共存している。そして、現時点で社会的弱者にはあてはまらないひと、取

入や家族関係の変化、自身や家族の加齢や傷病によって、いつかは社会的弱者になり得る。

社会的な弱者にとって「孤立」は致命的である。孤立の果てに迎えた生命の終焉の物語は、わたしたちに多くの問題を突きつけてくる [中沢・結城 2012] [菅野 2019]。ただし、ここで注意深く見ておかねばならないのは、社会的弱者の孤立や孤独死が、単純に独居（一人暮らしをしていること）から引き起こされる問題ではないという事実である。社会との接点の欠如は、親族やパートナーとただ単に同居することで解消できるものではないからだ。

さらに、親族や知人との関係を保っていればよいというわけでもない。むしろそうした人間関係によって（それを避けるために）、孤立するケースも考えられるからだ。

都市のパーソナル・ネットワークや居住満足度などを研究する都市社会学者の原田謙と杉澤秀博らは、独自の調査分析から興味深い指摘をしている。それによれば、親族や知人との人間関係からのサポートが幸福感（生活の満足度など）に与えるプラス効果よりも、否定的相互作用によるマイナス効果のほうが大きいという²。

この調査結果からは、「人間関係を主体的に選択

¹ R.D.レイン 2002『レイン、わが半生：精神医学への道』中村保男訳、62ページ

² さらにこの調査結果からは、男性は、他者に情緒的サポートを求めることへの抵抗感が高い傾向があり、一方女性は、とくに親族との人間関係（相互作用）において否定的な態度を示す傾向がはっきりしていることが示されている。

している高齢者像」〔原田2017:92〕が見えてくる。原田はつぎのように述べている。「主観的な幸福感にとって、手段的・情緒的サポートをいかに増やすかという視点ではなく、多くを要求してくるあるいはイライラさせられる否定的相互作用をいかに減らすかという視点が重要であることを意味している」〔原田2017:94〕。

殺人事件の約30%が親族間で起っているというデータ（平成22年版犯罪白書特別調査）をみれば、親族や知人といった親しい間での人間関係が多大なストレスを引き起こしていることは容易に推察できる。たしかに子育て期や介護中における親族のサポートはありがたい。しかしその「サポート」が、近しいがゆえに過剰であったり、押し付けがましく、恩着せがましいものであったりするならば、諸刃の剣である。経験上、それを身に染みて知っているからこそ、家族や親族と距離をとって自分のペースで生活することを選ぶ高齢者もいるのである。

「おひとりさま」であることを積極的に選びとり、自分なりの楽しみや生きがいを見つけて生きる高齢者がいる。かれらのルポルタージュや本人による独白など、孤独がいかにして「贅沢な愉楽」となり得るのかを綴った数々のエッセイからわかるのは、積極的な“孤独”と、やむをえない事情での“社会的孤立”とは、まったく別物だということだ。

都築響一（2013）は『独居老人スタイル』のまえがきで、独居老人というのは「憐れむべき存在」なのだろうかとの疑問を投げかけつつ、「あえて独居老人でいること。そして、あえて空気を読まないこと。それは縮みゆく、老いていくこの国で生きのびるための、きわめて有効なスタイルかもしれない」〔前掲書:3〕と挑発的に述べている。

彼が取材した「独居老人」は、男女問わず、必ずしも高所得ではないものの、強烈な個性や独自の人生観を持っている。かれらの写真やインタビューからは、これ以上ないほど自らの人生を謳歌してはいるが、社会から完全に隔絶されているわけではないことがうかがえる。

元NHKアナウンサーの下重暁子（2018）も、エッ

セイ『極上の孤独』のなかで、「孤独を愉しむ思考法」を語る一方、連れ合い（伴侶）や数少ない友人と、距離を保った付き合いを実践している様子を、ユーモアを交えて語っている。

これらの事例は、特別な人物による例外的で特殊なケースかもしれないが、そこには形式ではとらえきれない「現実」が示されている。

緩和ケアや在宅医療を実践する内科医の西智弘は、地域が個人を孤立させないようにしている数多くのモデルケースを紹介するなかで、「孤独を守りつつ、孤立を解消する」という「ちょっとおせっかいなアプローチ」の必要性を指摘する〔西ほか2020b:102〕。人付き合いが苦手で孤独を愛するひとであっても、細々と社会とつながっていることは重要で、その細い糸を切らないようにするというわけだ。

つまり、根本的な問題は、高齢者（社会的な弱者）が「一人で生活する」という居住形態ではない。高齢者をはじめとする社会的弱者が、ある特定の生活スタイルを、数多くの選択肢のなかから積極的に選びとった結果かどうか、そして、家族と同居であれ施設への入所・入居であれ、プライバシーは保たれつつも、社会から隔絶された孤立状態になっていないかどうか、といった点である。

以下本論では、社会的な繋がりを維持するための方策について、地域と社会的弱者との関係を念頭におきつつ、ある高齢者福祉施設での取り組みを参考に考察したい。

福祉施設が地域社会と連携を保ちながら活動（協働）する事例は、近年注目されているが〔山崎2019〕、それぞれの地域や住民のニーズによって、その方法は様々ではない。それとは逆に、連携はおろか、福祉施設に対する地域住民からの反発や開設反対の声が上がることも少なくない。そういった現状のなかで、本論でとりあげる「杜の家やしお」は、社会的な「生活を整える」ケアをどのように実践し、地域社会との関係性をどうアプローチしているのだろうか。次章で詳しくみてゆこう。

第1章 「杜の家やしお」の取り組みと実践

1) 施設の沿革・理念・事業概要

本論で事例として取りあげるのは、埼玉県八潮市鶴ヶ曾根にある特別養護老人ホーム「杜の家やしお」である。この施設は、千葉県を活動拠点とする「社会福祉法人福祉楽団」³が2008年4月に開設。その後、2012年10月には、訪問介護ステーション杜の家やしお、2013年7月には「無料学習支援杜の家やしお（寺子屋）」のサービス提供を開始した。2020年2月時点での実施事業は、特別養護老人ホームのほか、ショートステイ、訪問介護・居宅介護、居宅介護支援・相談支援、配食サービス、学習支援事業、企業主導型保育事業である⁴。

オーケストラを想起させる「福祉楽団」という法人名には、それぞれのひとが「それぞれの楽器を持っていて、それぞれを尊重しあうようにひとつの音楽をつくっていく。福祉実践もそのようにありたい。」という思いが込められているという⁵。公式ウェブサイトのトップメッセージには、理事長の飯田大輔の言葉がつぎのように綴られている。

「社会にはいろいろな人がいます。普段はそれに気づいていないこともあります。いろいろな人がいる、社会は多様である、という前提に立ち、福祉という手段を使い、だれもが、一緒に楽しく暮らせるような社会をつくりたいと考えています。そのための福祉実践も多様であり、従来の福祉を超えていく必要があります。制度に決められた福祉だけをやっていただけのでは、おもしろくありません。「制度のスキマを埋めていく!」「もっと楽しくするには?」と、いつも頭をめぐらせて、コンヴィヴィアルな社会の実

現に向けて今日も行動していきます。

「ケアを考え“暮らし”を良くし福祉を変える」私たちの実践は始まったばかりです。引き続き、応援していただきますようお願いいたします。」⁶

このメッセージのなかで、福祉楽団が目指す「ケア」とはなにか。同ウェブサイトでは、ケアとは家事代行などの表層的な「お世話」ではなく、「人体の構造と機能を基礎に展開される科学的実践」だと説明している。ケアの実践場面において重要なこととしては「介護福祉士も看護師も⁷「生活を整える」という共通の目的に向かって協働していくこと」、そして「「生命力の消耗を最小にするように」生活を整えていくこと」である。具体的には、施設利用者の入浴や沐浴に際して、その時々での身体的な状況をよく観察し、考えて、いまお風呂に入れるべきか、シャワーだけか、足浴だけか、といった、各個人のコンディションを観察しながら、最も「生命力の消耗を最小にする」介護の実践を心がけるということだ。その過程のなかで、自立支援につなげてゆくのだという。

こうしたケアの考え方を含め、福祉楽団が掲げる方針のなかで、とくに本論で着目したいのは、ケアされる側もケアをする側も、社会的な存在であるということをかかえて絶やさないようにするか、という側面である。

2) 施設での取り組み

筆者は、2020年2月5日（水）、この施設を訪問し、数名の職員・利用者から話を聞くことができた。おもに案内をしてくれた施設の常勤職員（当時）の青木さとみ（敬称略）は、時折、利用者に声がけをし

³ 2005年7月に、社会福祉法人豊和会（2001年12月設立）から法人名を変更。

⁴ 同様のサービス事業は、拠点である千葉県内においてはもちろん、2014年4月以降、埼玉県吉川市でも展開している。

⁵ この考え方は、以下の論考から着想を得ている。「民主的な社会に暮らす方法を学びたいのならば、オーケストラで演奏するのがよいだろう。オーケストラで演奏すれば、自分が先導するときと追従するときがわかるようになるからだ。他の人たちのために場所を残しながら、同時にまた自分自身の場所を主張することはいっしょにかまわない」（A・グゼリミアン、中野真紀子訳『バレンボイム/サイド 音楽と社会』みすず書房）。

⁶ <http://official.gakudan.org/about/>（最終閲覧日2021年1月16日）

⁷ この他、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、医師、管理栄養士、調理師、社会福祉士、精神保健福祉士、ケアマネージャーなどもケアに参画している。

たり、職員同士とやりとりをしていたが、その様子から、リラックスしながら職務にあたっていることがうかがえた。

「施設」である限り、どうしても独居とはちがひ、入居者⁸にとってはさまざまな制約が課せられるが、そういった条件下においても、自宅での慣れ親しんだ生活に近づけるよう工夫されているところが印象的であった。この施設は、建物や家具、インテリアに木材をうまく取り入れているところだけでなく、以下の点が特徴的であった。

- (1) 高齢者施設や病院に特有の匂いが無い。築12年を経過しているが、建物自体が換気や採光しやすい構造（開閉できる窓の多さや天窓など）になっており、つねに換気を徹底しているためだという。換気を徹底するという考え方は、F.ナイチンゲールの『看護覚え書き』の方針に沿っている。また、汚物を扱う部屋と来客も利用するエレベーターを離して配置するなど、建物内の導線を考えた間取りになっている。
- (2) 施設で働く介護者たちの服装が、白衣や作業衣ではなく、ジーンズなどのカジュアルな服装であること。その理由は、家庭的な雰囲気を出すためであり、杜の家（施設内）は、あくまで"生活の場"（普段の生活の延長線で）であることを意識しているため、制服を着用しないのだという。ただし、施設外への訪問のときには、職員は制服（ポロシャツ・ベスト・ウィンドブレーカー）を着用することになっている。
- (3) 職員を対象とした海外研修の制度や資格取得の補助制度などがあり、人材育成にも力を入れていることがうかがえる。実際に研修に参加した職員は、日本の福祉の現場との違いを感じることができたと話していた。
- (4) 施設の職員だけでなく、地域住民も利用できる

保育園（ツルガソネ保育所）が併設されている。定員は0歳児から3歳児までの19名である。参観したときは、ちょうど昼寝の時間だったため子どもの姿は見えなかったが、木材を利用した保育室は落ち着いた雰囲気だった。

- (5) 地元住民や近隣の高校生などが気軽に入りにできるような開放スペース（Free Wi-Fiの使えるベンチ）やバスケットコートが敷地内にある。施設のお手洗いも利用できる。
- (6) 10の個室と、キッチンやリビングなどの共用空間、それらを合わせて1つのユニットとなっているが（ユニット型特養）、それぞれの階や居室を「番号のみ」で呼ばず、階数を「丁目」、各階のそれぞれのユニットを東西南北で示し、個室を「番地」で呼ぶ。

たとえば、3階の南側エリアにある4号室は「304号室」ではなく「3丁目南4番地」といった具合である。入居者によってこの施設が「終の住処」でもあり、それぞれの思いのなかで、「自分のうち（町）」と思ってくれるひともいればいい、という配慮である。代表の飯田によれば、このアイデアは、他の施設での先行例を参考にしたという⁹（写真1参照。写真は「2丁目南」エリアの入り口。左手の小さな窓から見える部屋には、職員が常駐）。



(写真1)

⁸ 厚労省による特別養護老人ホームの設備及び運営に関する基準では「入所者」と表記されているが、福祉楽団では「入居者」という表現を主に採用している。ただし、厳密にいうと杜の家やしおでは、特養は「入居者」、ショートステイは「入所者」や「利用者」と使い分けているという。

⁹ 2021年1月27日、同法人が運営する「恋する豚研究所」でのインタビューより。

- (7) 各階に開放的な対面式キッチンが4つ設置されている(写真2参照)。特別食(胃瘻やミキサー食など)の場合は、厨房から上がってきたものを提供するが、それ以外はなるべくこのキッチンを利用し、自宅に近い環境をつくるよう工夫している。具体的には、そのエリア担当の職員が、夕食の味噌汁を作り、炊飯器から炊きたてのごはんを茶碗に盛る(1日3食)。さらに、朝10時と午後3時には、コーヒーマーカーでコーヒーを淹れる。入居者の好みやその日の気分に合わせて、紅茶や緑茶など個別に対応することもある。すこしでも選択ができることで、入居者の生活に「メリハリ」ができ、生活リズムを整えたり、日常生活のなかで使う五感(とくに嗅覚)を意識したり、といったことにつながるのだという。



(写真2)

- (8) 慣れ親しんだ生活に近い環境づくりの一環として、入居者の食器(茶碗とお碗、箸やカップ)は自宅で実際に使っていたものを利用している。そのため、大きさや柄がバラバラである(写真3、写真4を参照)
- (9) 施設で入居者が亡くなった場合、さまざまな処置・手続きとともに、そのひとが過ごしていた居室に祭壇を用意する。遺体は裏口ではなく、正面玄関から職員や他の入居者に見守られて送り出される。ちょうど筆者が訪ねた日の朝、一



(写真3)



(写真4)

人の入居者が亡くなり、お昼過ぎ、多くの職員らが玄関に揃って、見送るところだった。

- (10) 施設内の何か所かに、遊具のある場所(写真5を参照)や図書スペースなどが設置されている。これらの場所は、入居者を訪問する家族や友人らが楽しめるスペースであると同時に、入居者のリハビリ(的当てゲームボードやボールプールは筋力維持のため)や、入居者の余暇のため(本をたくさん借りていく入居者もいる)



(写真5)

に使われている。ときどき読書会も行うという。

(11) 埼玉県内では八潮以外にも、吉川団地の商店街で訪問介護事業所の一部をコミュニティ・スペースとして活用し「みんなの食堂」を運営。運営は地域住民が主体となっており、福祉楽団としては、場所と食材を提供しているだけだが、最近では協力企業や周辺農家からの寄付も多くなり、「フードバンクのような状態」だという。

(12) 地域住民との交流の一環として、「ごはんの日」を実施。毎月5の付く日のお昼、周辺の地域住民とともに料理をし、それを皆で食べるイベントである。参加者の自宅までの送迎もある。ある女性入居者は、調理の手順や食事中的の会話からは、認知症とおぼしき言動が垣間見られたが、馴染みの職員と一緒にいつもの場所ためか、「食事を作ってもら側」としてではなく「作る側」となって活発に活動していた。また、周辺住民の参加者のなかの一人、八潮団地在住の独居女性は、この「ごはんの日」を毎月とても楽しみにしていると語っていた。その理由は「ひとりで食べたってつまなし、作ろうって気にならない」からだという。

「あたしは食べるだけー」と茶目っ気たっぷりに笑いながら筆者の隣に座った大柄の女性は、17歳のときに北関東の農村から八潮に奉公に来て以降、結婚も子育てもすべて八潮市内。年老いた夫と息子一家と二世帯住宅に住むが、ほとんど交流がないので「ここに来てる」のだと語っていた。

さらに、利用者は少ないものの「買い物バスの日」もある。八潮市民が買い物に行けるよう、毎月10日、20日、30日に、利用者のリクエストに応じて、近隣の商業施設に向かう乗り合いバス（定員5名）を運行している。

第2章 社会的な関係を意識することの意味

本章では、「杜の家やしお」の取り組みの特徴について、社会的な関係を意識するという観点から、その意義を考えてみたい。ここで注目する「社会的」なこととは、施設内部での「社会的な営み」と、施設外部（地域社会）との関係性において展開される社会的な営みである。

1) 施設のなかで意識する社会

まず着目したいのは、施設内部でいかに社会的な営みを作り出し、保持しているかという点である。時間や空間を、馴染みのある他者とともに過ごすこと（そう意識すること）、すなわち社会的な関係のなかに自分が位置付けられていることを自覚するための工夫は、つぎのような配慮に示されている。

たとえば、各階で漂う味噌汁や煎れたたのコーヒーの香りは、単調で均質な空気感に満たされた施設では倒錯しがちな時間軸を、一般的な生活リズムのそれに近づける。消毒剤や汚物の匂いではなく、心地よいリアルな生活の匂いが漂う風通しの良い館内の空気は、入居者の生活リズムを作り出す。

なにかの匂いを嗅ぐことによって、その匂いにまつわる遠い過去の記憶や感情が蘇る「ブルースト現象」と呼ばれる現象があるが¹⁰、記憶障害が認知症の症状のひとつであるならば、こうした嗅覚の刺激が（症状によっては）何らかの変化をもたらすであろうことも想像に難くない。すくなくとも、居室の外から定時に漂ってくる匂いによって、一日の生活の中に一定のリズムをつくる効果はあるだろう。

嗅覚への刺激と同様に、聴覚的に社会の一員（地域社会の住民）であることを意識させる配慮としては、一般的な病棟や施設のように部屋を番号で呼ぶことはしないで、番地や丁目で呼ぶという工夫だ。町に住んでいるような感覚にすこしでも近づけるためだという。

さらに、「利用者（ケアされる側）」と「職員（ケ

¹⁰ フランスの作家マルセル・ブルーストの小説『失われた時を求めて』で、主人公がマドレーヌを紅茶に浸したときに、その香りで幼少時代を思い出す描写からこの現象は名付けられた。

アする側)」という視覚的な壁（服装に象徴されている）をなるべくつくりたくないにすることや、基本的には昼間は建物の出入り口を施錠しないようにしている点も興味深い。

職員が気づかないうちに外出してしまうこと（いわゆる「徘徊」とよばれる行動）¹¹は過去にも何度かあったが、すぐに発見できたこともあり、施錠しようという流れにはならなかった。そもそも職員がしっかりと入居者に目を配ったり、入居者の言動を日頃から注視していれば、ある程度は防げるという考え方が根底にある。

青木は後日、追加で行ったメール取材¹²において、つぎのように回答している。

「入居者の言動を日頃から確認していれば施設の外に出たくなるような理由は、何らかの形で見えてくるはずです。本人にとって理由がある外出であるならば、それを徘徊と呼ぶことはできません。それがたとえ介助者には無目的であるように見えたとしても、です。杜の家やしおの介護士たちは、介護記録に徘徊ではなく散歩と記すことがほとんどです。（略）

入居者が職員に告げることなくどこかに出かけてしまうかもしれない、現在の身体機能以上に動こうとして転んでしまうかもしれないというリスクは常に抱えています。リスク回避のために施錠し身体拘束をしたとしても、それは完璧な対策ではなく、どこかに抜け道があります。だったら、規制の強化ではなく入居者を信頼して別の方法（こまめな見守り）でそのリスクと付き合いたいのです。

また、この信頼は、介護士から入居者への一方向のものではないと私は考えています。例えば、介護士が四肢麻痺のある入居者の身体をベッド上

で横に向けて排泄介助をする時。そのまま入居者をベッドから床へ突き落とそうとすれば、できてしまいます。そのリスクを抱えながらも、普段通り介助を行なってくれるだろうと入居者は介護士を信頼して、全身を委ねます。横を向いた視線の先には、床を捉えながら。

コミュニケーションの積み重ね＝信頼の積み重ねであり、それが双方向に行われるからこそ、高齢者施設で高齢者が「社会的な存在」として生き生きとしてくるのでしょうか。」

以上のような、社会的な営みを途絶えさせないひとつひとつの取り組みは、施設職員への研修の機会の提供や人材育成のシステムや、施設の外の世界（地域社会）を意識した運営とも深く関わっているだろう。以下では、その点に注目しながら考察したい。

2) 地域社会とのつながり

つぎに指摘したいのは、施設外部の地域社会とのつながりを積極的に構築し、維持しようとしている点、すなわち、高齢者や要介護認定を受けたひとびとだけをケアの対象にしないという方針である。

地域は地域で生活困窮者や高齢者の見守りを行い、他方、施設は施設でそれぞれの専門領域で特定の対象者だけに向けたサービスを展開する、いわば「棲み分け」がされた活動については以前から疑問があった。その根底には、地域社会のなかで福祉施設の入居者や職員が隔離された状態になることで、互いの情報が行き来しなくなり、ますます施設が（入居者ごと）地域社会から孤立し、地域は排除の論理を強化していくのではないだろうか、という漠然とした不安がある。

施設のスタッフ側も地域ボランティアの担い手側も、それぞれに人員不足や、個人情報保護などの制

¹¹ 「徘徊」という表現に関しては、とくに近年、再考が促されている。美学の分野から身体論を展開する伊藤亜紗や、認知症専門医の長谷川一夫などの指摘にあるように〔伊藤2020〕〔長谷川・猪熊2019〕、当事者視点から考えると、無意味にあてもなく歩き回るわけではないからだ。実際に介護に携わっている青木も、徘徊という語は「なるべく避けたい」という（2021年2月1日、メールでの回答より）。

¹² 2021年2月1日

度的な限界があることは理解できるものの、施設と地域社会の分断が、より深刻で大きな社会的分断の象徴であるような気がしてならなかったのだ。では、どうすればいいのか。

2017年、そうした分断を乗り越える具体的な取り組みが、高齢者住宅「銀木屋」¹³において試みられていることを知った。その住宅を運営する会社の代表である下河原忠道は、筆者の講座で認知症のVR体験を実施するとともに、高齢者のための集合住宅の一角で、駄菓子屋を開店していること（近隣の子どもたちが集まってくる）、地域の清掃事業や行事の手伝いを認知症の高齢者が請負っていることなどを、写真付きで説明してくれた¹⁴。

杜の家やしおでも、若者が利用できるFree Wi-Fi基地やバスケットコートなど、大袈裟なものではないが、入居者や職員以外のひとが敷地内に入ることを拒まない姿勢がそこからは垣間見られる。その他、筆者の取材当時は、近隣の子どもたちを施設の敷地内に入れるようなプログラムを計画し、学習支援ボランティアも募集していた。

昨今では、積極的に地域に開かれた福祉施設も徐々に増えてきているようだ。たとえば、北九州のホームレス支援施設（無料定額宿泊施設）「抱樸北九州」の1階には、通称「出てこい食堂」というレストラン（就労訓練事業所）が併設されており、地域住民や生活困窮者だけでなく、当初はこの施設の建設に反対していた住民も食べにきているという[奥田2020:147]。社会福祉法人法上の第2種施設のため、国からの補助がない代わりに、誰もが無条件に利用できる仕組みだ。レストランの入り口のカードリーダーは、特典ポイントを貯める機能があるほか、入退出管理記録によって常連客の安否が把握でき、ケアにつながられるようになっている。

ところで、この施設を運営するNPO法人抱樸の

理事長の奥田智志は、生活困窮者への支援活動を長年続けてきた経験から、社会的孤立は困窮者個人の問題ではなく、かれらを排除する社会の側の問題ではないかと問うている。それについて奥田は、社会をバケツに、そこに溜まっている水を人間に喩えて、わかりやすく説明している。

「バケツの底に穴があいていて、そこから、つまり社会から人間が落ちていく。いろんな支援団体が、やれ子どもの食堂だ、やれホームレス支援だといって、下まで落ちると死んでしまいますから、途中で受け止めて一生懸命バケツに戻そうとする。でもね、漫然とそういうことだけやっていて、バケツの穴があいているということをお問わないならば、結局、そういう歪んだ社会の補完作業で終わってしまう。歪んだ社会を助けていることになるわけです。」[奥田2020:151]

こうした問題意識をふまえ、困窮者らが地域生活を継続するための支えとして、奥田は28年かけて、地元の不動産業者や法律・医療関係者などのさまざまな地域資源を作ったという。要するに、困窮者個人への対応だけではなく、地域社会への働きかけを強化したのだ。奥田の比喻で言えば、バケツの穴を塞ぐ（あるいは小さくする）作業である。

こうした事例も含めて、杜の家やしおをはじめとする各施設が試行錯誤するさまざまな取り組み¹⁵についてあらためて考えてみると、施設の利用者だけが隔離された状況のなかで福祉サービスを受ける、という構図ではなく、地域社会に開かれた施設であることの社会的意義が見えてくるのではないだろうか。

こうした地域社会との関係を意識した福祉施設の

¹³ (株) シルバーウッドが運営するサービス付き高齢者住宅とグループホーム。

¹⁴ 銀木屋船橋夏見での事例については、「高齢者住宅のあらたな取り組み「仕事付き高齢者住宅とは」」[西ほか2020b:149]に詳しい。

¹⁵ 杜の家やしおについて、付け加えて言えば、地域にひらかれた（大きな枠組みで言えば、社会にひらかれた）福祉施設の取り組みのひとつとして、施設の職員たち（ケア・ワーカーたち）を施設に閉じ込めておかず、海外研修や各種の資格取得を後押しする姿勢も評価されてしかるべきだろう。

活動は、いまだ一般的とはいえない。それだけに、上記のような取り組みは、特筆に値すべきものであろう。

第3章 covid-19への対応について

「杜の家やしお」での取り組みは、高齢者福祉施設でのほんの一例であるが、そこから見えてくるのは、入居者をとりまく社会関係を維持し、社会的な生活を復活・促進する具体的な試みである。

筆者がこの施設へ訪問した直後、新型コロナウイルスによって国内外の状況は一変した。そのため、再度の訪問やより詳細なインタビューを断念せざるをえない状況になったが、コロナ禍でのさまざまな制約をどう乗り切っているかについて、メールでの取材を行った（以下の回答は青木による。2020年11月18日の時点）。

1) 入居者と家族との面会について

家族が施設に来所し、別の場所でiPadのFace Time（ビデオ通話）で面会する形式と、家族の自宅からzoomで面会する形式があり、また週1回であれば3密が回避できる場所で20~30分の対面での面会が可能となっているという。看取り期の入居者には、頻度・時間に関わらず居室での面会を許可している。

ただし、いずれの方法も、事前に電話予約が必要で、covid-19第三波の状況によっては、面会制限がまた厳しくなる可能性がある。

2) いくつかの工夫と配慮

コミュニケーションや対話、これまでやってきた取り組みなどを維持するために、IT技術を積極的に取り入れている。法人が採用している介護記録ソフト「ケアコラボ」¹⁶は、Twitterのような使い勝手

で、職員だけでなく家族も閲覧できるようになっている。そのため、「コロナ前よりも写真や動画をアップして入居者の様子が家族にも伝わるような記録を心がける職員が増えてきた印象を受ける」と青木は評価する。

IT技術を駆使する一方で、状況に応じてコミュニケーション手段を使い分けている。たとえば、家族への情報提供として、手紙（文書）や電話も積極的に活用しているという。面会が原則禁止の状態から、基準が緩和されて対面での面会が可能になった際、法人はすべての利用者家族に手紙で通知。しかし、その情報がうまく伝わらない家族も多いため、電話連絡によって、面会が可能になったことを口頭でも伝えた。

3) 地域社会とのつながりの現状

毎月5の付く日に開催している“ごほんの日”は、2020年9月ごろから再開。それは「入居者のためというよりは、地域に暮らす高齢者ためにかれらの活動の場を絶やさず、かれらの生活ぶりを把握するためという側面も強い」という。入居者の参加に関しては、毎回参加人数に定員を設けて3密を回避している。

終章

1) 社会のなかで暮らすということ

ある土地や建物に生活者として一定期間居住するかどうかを決めるとき、最新の設備や耐震性だけでなく、立地や交通の便、そして周辺の雰囲気や地域性、近隣に誰が住んでいるか、といった点も判断基準のひとつになる。まして、なんらかの困難を抱えたひとにとっては、たとえ最寄り駅からは遠く、建物の構造が多少不便であっても、ご近所さんやなじみの店があるなど、人間関係が良好で住み慣れてい

¹⁶ 「ケアコラボ」とは、介護記録を職員や家族など複数で共有できるシステム。スマートフォンなどで簡単に個別の記録を（文章だけでなく写真や動画で）作成でき、その記録をタイムラインで確認したり、それをもとにケアプランを作ることもできる。申し送り時間の短縮やペーパーレスによって、事務作業が効率化される仕組みである。ユニークな機能としては、古い写真のデータや思い出話を投稿して「思い出のアルバム」（人生録）をつくるプログラムがある（ケアコラボ公式ウェブサイト <https://page.carecollabo.jp> 最終閲覧日2012年1月20日）。

るかどうかが重要なポイントとなる。

UR都市機構埼玉地域支社が、第Ⅳ期の草加松原団地建替事業の対象者（対象戸数899世帯）に対して行った住宅希望に関する調査では、「低層階（1階を含む）住戸への入居を希望する」声が約50件あったという。高層階よりも中・低層階のほうが生活しやすいと考えるひとが挙げる理由のひとつが、外出のしやすさだという¹⁷。その回答からは、ひとびとの社会的なつながりの希求がうかがえる。

昭和30年代～50年代前半までのUR賃貸住宅は、主に5階もしくは4階建ての住棟で、階段室をはさんで各階に2戸の住宅が配置されるスタイルであった。筆者が調査した草加松原団地も、テラスハウスを除いては、同様の構造であった。

そのような住棟は、エレベーターがないため高齢者向けではないとされている。しかし、平成17年のUR賃貸住宅居住者定期調査からは、つぎのようなこともあきらかになっている。すなわち、「風通しと採光は抜群」で「階段を挟んで10戸が向かい合っているので、お互いに顔見知りになる機会が多いため、ご近所とのコミュニケーションや防犯上の安全性に対する満足度は、最近主流の片廊下式の住棟やオートロックのついた住棟にお住まいの方よりも高くなって」いるという¹⁸。

筆者が行った、草加松原団地からコンフォール松原（建て替え後の名称）に戻り入居をした住民への調査においても、同様の声が聞かれた。高層階の眺望の良さに満足するひとがいる一方、なかには、高層のオートロック式での生活になじめない、同じ住棟の他の住民と親しくなれないので寂しい、建て替え前に親しかったご近所さんと気軽に行き来できなくなって残念、と答えるひとがいた。

高齢や傷病などによって身体的に制約のあるひとが安心して居住できる、もしくは居住しやすい集合住宅とは、住戸の外と行き来しやすいこと、低層階で世帯数の少ない建物である。ただし、そうした物

件は、防犯の面から言うとハイリスクかもしれないし、不動産・開発業者からすれば収益の面で無理があるだろう。さらに、階段しかない建物は、足腰の弱ったひとにとっては「便利」とはいいがたい。

中・低層階の住居がいいか、高層階のオートロック式がいいかは、それぞれのライフスタイルや価値観によって意見が分かれるところだろう。しかし問題の本質は、わたしたちは住環境に、自分が納得できるかたちでの安全基地を求め、多かれ少なかれ社会的つながりを維持する素地を求めているのはいいか、ということである。

こうした希求は、高齢者の住まいに限ったことではない。社会的弱者への支援という大きな枠組みからみると、つぎのようなケースも住環境や支援のあり方を考えるヒントになるだろう。

1990年代のアメリカにおいて、ホームレス支援の流れのなかで出てきた「ハウジング・ファースト」という支援方法がある。困窮者のニーズや同意にもとづいた支援とともに、治療や職探しを条件としないで住まいを提供する活動である。つまり、一時しのぎの住居や部屋を、期間限定かつ条件付きで提供しただけではほとんど効果がないばかりか、再びホームレス状態に戻っていくことが多いという。そうした実状をふまえて考え出された方法である。

日本におけるハウジングファーストの実践をまとめた著書のなかで、精神科医の森川すいめいは、ハウジングファーストは「単なる住まい支援の取り組みではない。人生の歩みをもとに支えるものである」[森川2018:19]と述べている。

社会的弱者への支援の方法として、生活保護費などの現金を支給し、寝る場所を提供することは、たしかに重要である。しかし、それが「条件付き」だとしたならば、しかもその条件が、社会的つながりを切るようなものであるならば、そうした支援はかえってかれらを追い詰めてしまうことにもなりかねない。それでは困窮のスパイラルから逃れられるは

¹⁷ つけ加えていえば、災害時の停電でエレベーターが止まった場合を考えると、自力で階段を上るのが困難なひとにとっては、高層階はきわめてリスクの高い住居となりうる。[岡村2019] 第3章を参照。

¹⁸ 『団地のゆるさが都市（まち）を変える』新建築別冊2014年7月、「COLUMN」p.12

ずもない。だからこそ、社会的ネットワークやニーズにあった支援が保障され、尊厳を保ちつつ安心して暮らせる場所を提供することが重要なのである¹⁹。

2) 社会的ネットワークのなかの「生」

今後の福祉楽団の活動の方向性としては、高齢者福祉施設の拡充だけではなく、支援の対象者を幅広く捉え、地域社会のなかでより重層的で包括的な支援体制を整えることにあるという。たとえば、介護保険と繋がることのできる高齢者は、ある程度支援の方法やねらいが見えてくるが、見かけ上あるいは制度上、支援の対象とみなされない困窮者もいる。後者の場合、本来ならば誰かに援助を求めるべき状況にあることを、それは「自分のせい」だと解釈し、援助や支援から自ら遠ざかってしまうことさえある。とくにそうしたケースへのアプローチにおいては、柔軟な姿勢が問われる。

援助を求めることができないひとびと（支援困難事例）への理解や対応の具体例を紹介した著書『「助けて」が言えない：SOSを出さない人に支援者は何ができるか』のなかで、精神医学を専門とする松本俊彦は、つぎのようにのべている。

「もしもある人の援助希求能力が乏しいとするならば、そこにはそうなるだけの理由がある。その人は、内心、助けを求める気持ちがありつつも、それによって偏見と恥辱的な扱いに曝され、コミュニティから排除され孤立するのを恐れてはいないだろうか。あるいは、生育歴上の逆境体験のせいで、「世界は危険と悪意に満ちている」「自分には助けてももらうほどの価値はない」「楽になったり幸せになったりしてはいけない」と思い込んではいないだろうか。だとすれば、彼らは援助を求めない。こちらから

手を差し伸べても、拒絶されるのは当然だ。それどころか、みずから助けを求めておきながら、突然、翻意して背を向けることさえあるだろう。」[松本2020:1-2]。

援助希求能力の乏しいひとびとが援助を断るのは、必ずしも「援助を必要としていない」という事実を示すものではない²⁰。つまり、なんらかの事情で「助けて」と言うことができないひとにとっては、差し伸べた手を振り払うような行為は日常的であり、助けて欲しくないわけではないからだ。

そうしたケースを扱うときに必要なのは、「援助」ではなく「伴走」というスタイルだと、本論の調査に協力してくれた青木は語る。現在彼女は、杜の家やしおから配置転換し、同法人が運営する中核地域生活支援センター香取CCC（千葉県からの委託事業）で、相談員として活動している。その活動は、公的な支援制度の対象者かどうかにかかわらず、あらゆるひとからの「どんな相談でも受けて伴走型支援をする仕事」だという。そこでの取り組みは、まさに上記のようなケースへの対応なのだろう。

加齢や疾病に一人きりで立ち向かい徹底的に抗うにしろ、尊厳のある生命の営みを自分から諦めるにしろ、もしそれが「自己責任」を前提に導き出された解決策であるならば、そこにもうひとつの道を提示する必要があるだろう。認知症になろうが、身体が不自由になろうが「生きることを歓迎される社会」、他者の助けを借りるのはあたりまえの「お互いさま社会」が前提となっているのであれば、あるいは、今後そうした社会のあり方が実現するのであれば、困難にひとりで立ち向かうか諦めるかという、二者択一でない生き方も可能になるのではないか。

孤立した個人が「他人様の迷惑にならないように」と右往左往したり、社会から隔絶された家庭や施設

¹⁹ 人間が社会的な動物であるならば、プロイラーのような生活はQOLを著しく低下させる。人間だけでなく、いまや「家畜」とよばれる動物たちにさえ「アニマル・ウェルフェア」という思想が適用されているのだ。効率化や利益の最大化を目指す大規模農場や事業者にとっては、到底納得のいく考え方ではないかも知れないが、その考え方は、世界的な潮流として無視できなくなってきている。

²⁰ さらに、何度も助けを求めたにもかかわらず断られた経験があったり、援助を断るポーズを取ってそれでも支援者が関わり続けてくれるか試しているような場合も考えられると青木はインタビューのなかで語っていた。

のなかに問題を押し込める状況は、まさに社会のあり方（社会が個人の困難をどう受け止めるか）の問題であり、「社会」の側の問題である。先にも述べたように、それゆえ孤独死は個人の問題ではないのだ。それは裏を返せば、社会とのつながりが、個別的な問題の解決の糸口となる可能性を示しているともいえよう。

地域社会の一部として、社会的ネットワークの延長線上で、個人を、家庭を、そして福祉施設を捉えることで、わたしたちが暮らす地域はあらゆる「生」を肯定する舞台となり得るのである。

参考文献

- 伊藤亜紗（2020）「信頼の風土」『わたしの身体はままならない』河出書房新社
- 稲葉剛ほか編2018『ハウジングファースト：住まいからはじまる支援の可能性』山吹書店
- 上野千鶴子『おひとりさまの最期』朝日新聞出版
- 岡村圭子2019『団地へのまなざし：ローカル・ネットワークの構築に向けて』新泉社
- 奥田智志2020「生活困窮者への伴奏型支援のかたちを探る」駒村康平編『社会のしんがり』新泉社
- 佐藤眞一2018『認知症の人の心の中はどうなっているのか？』光文社新書

- 下重暁子2018『極上の孤独』幻冬舎
- 菅野久美子2019『超孤独死社会 特殊清掃の現場をたどる 特殊清掃の現場をたどる』毎日新聞出版
- 都築響一2013『独居老人スタイル』筑摩書房
- 中沢 卓実、結城 康博2012『孤独死を防ぐ一支援の実際と政策の動向』ミネルヴァ書房
- 西智弘ほか2020a『ケアとまちづくり、ときどきアート』中外医学社
- 西智弘ほか2020b『社会的処方：孤立という病を地域のつながりで治す方法』学芸出版社
- 長谷川和夫・猪熊律子2019『ボクは認知症のことがわかった：自らも認知症になった専門医が、日本人に伝えたい遺言』KADOKAWA
- 原田謙2017「サポートを増やすべきか、否定的相互作用を減らすべきか？：社会的サポート、否定的相互作用とメンタルヘルス」原田謙編『社会的ネットワークと幸福感：計量社会学で見る人間関係』勁草書房
- 福祉楽団編2019『Annual Report 2019』
- 福祉楽団編2020『Annual Report 2020』
- 松本俊彦編2019『「助けて」が言えない：SOSをださない人に支援者は何ができるか』日本評論社
- 山崎亮2019『ケアするまちのデザイン：対話で探る超長寿時代のまちづくり』医学書院

（国際教養学部言語文化学科・教授）